

【モデルPOINT②】地域の連携による安全確保体制の構築

○挨拶運動と地域見守り活動の連携による安全確保体制の構築

モデル地域の取組 ～子どもと住民の関わりによる地域全体での見守り

白老町では、登下校時の見守り活動者による子どもたちへの挨拶運動である「にこにこプロジェクト」を進め、子どもたちが活動者との関係を深め、防犯への関心を高めるとともに、活動者のやりがい向上にも繋がっている。

また、挨拶運動とあわせて、町内会の「見守り隊」による、地域住民と連携した通学路の見守り活動を実施し、地域全体の目による安全体制を構築した。



見守り活動者による「挨拶運動」



通学路の見守り活動

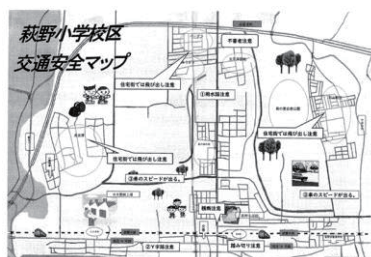
【モデルPOINT③】学校間で連携した取組の推進

○各校の情報共有による効果的な安全マップの作成

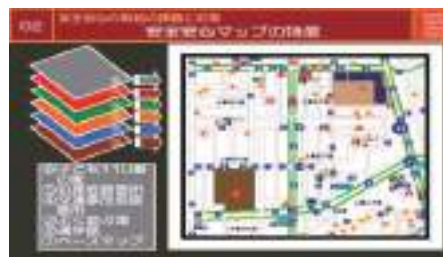
モデル地域の取組 ～中核教員対象の安全マップ作成研修

各学校の中核教員を対象に、学校安全アドバイザーから、安全マップの効果的な作成方法や、ICT技術を活用した効率的な更新方法などについて講義をいただいた。

研修では、各校が作成した安全マップについて工夫した点を発表するなどして情報共有し、安全マップの見直しに取り組んだ。



情報共有された各校の安全マップ



ICT技術を活用した更新方法

防犯教室（学級活動）学習指導案

日 時：令和3年12月7日（火）4校時
 場 所：第1学年教室
 生 徒：第1学年38名
 指導者：第1学年担任
 講 師：北海道教育庁学校教育局
 生徒指導・学校安全課
 金子 芳生課長補佐

1 活動名 防犯教室～SNSを正しく使おう～

2 本時の目標

SNSについて、自分の使い方を振り返ることで、課題を見つけ正しい使い方を見出す。

3 展開

段階	活動内容	教師の働きかけ	■評価と□支援
導 入	○これまでのSNSの使い方について振り返る。 ・良かったこと ・改善が必要なこと ○本時の課題を確認する。	・事前に行ったアンケートの結果を伝え、生徒一人一人が学習内容を自分事として捉えることができるようにする。	
SNSを正しく使うために、どのようなことに気を付ければよいのだろうか。			
展 開	○講師の話をお聴くとともに、問いかけに答える。 ・SNSのメリットとデメリット ・SNSの危険性 ・使用上、気を付けること ○講師に質問する。	・講師の問いかけに答えやすいよう、声をかけたり、簡単な話合いを促したりする。 ・質問がなければ促す。	
終 末	○ワークシートに、自分が気を付けていこうと思ったことを記述する。 ○自分の考えを発表する。 ○本時の振り返りを行う。 ・授業の感想 ・他の生徒の考えを聞いて良かったこと	・自分のICT端末がない生徒には、講師の話をお聴いて考えたことなどを記述させる。 ・講師への質問で、仲間から大切な内容が示された場合は、そのことに関連付けて記述させる。 ・机間指導の際に、共有したい内容を記述している生徒に発表を促す。	■ワークシートに、自分の考えを書いている。 □講師の話などを想起させる。

2 実践を振り返って

実践をとおして、次の成果及び課題が明らかになった。

1 関係機関との連携による「モデル学習指導案」の作成

【成果】

- ・ SNS 等の危険性についての事例を交えた体験的な講義による、生徒の防犯意識向上
- ・ 生徒が SNS の正しい利用方法や危険性について主体的に考える活動を取り入れた授業による授業の活性化と防犯に対する理解度の高まり
- ・ モデル地域内各校への、効果的な指導方法の普及

【課題】

- ・ 系統的な指導のための小学校との連携や指導内容の更なる充実

2 挨拶運動と地域見守り活動の連携による安全確保体制の構築

【成果】

- ・ 挨拶運動での見守り活動者との関わりによる、児童の防犯への関心の高まり
- ・ 通学路における児童生徒の安心感の醸成や見守り活動者の士気高揚
- ・ 「地域全体の目」による、不審者事故の未然防止

【課題】

- ・ コロナ禍における挨拶運動や見守り活動の活性化

3 各校の情報共有による効果的な安全マップの作成

【成果】

- ・ 学校安全アドバイザーの講義による、中核教員の安全マップ作成スキルの向上
- ・ 各校の安全マップ作成上の工夫点を共有することによる、各校の安全マップの見直しと今後の効果的なマップ作成

【課題】

- ・ 中核教員が得た安全マップ作成スキルの校内教職員への普及と来年度の取組への確実な反映

〔今後の取組について〕

- ・ 本年度の取組を、各学校間はもとより、校内の教職員間でも共有し、生徒指導協議会に位置付け内容をブラッシュアップし、展開していきたい。
- ・ また、安全マップには、防犯だけでなく、交通安全や防災のアドバイザーや構成員からいただいた助言内容を踏まえ、防犯の視点に、交通安全や防災の視点に基づく危険箇所を加えるなど、児童生徒が様々な危険から自分の身を守る資質・能力を身に付けることができるよう、取組内容を充実させていきたい。

3 講 評

学校安全アドバイザー：株式会社まちづくり計画設計 統括技師 松村博文氏

1 関係機関との連携による「モデル学習指導案」の作成について

- 白老町では、不審者対応に関する防犯教室だけではなく、ネット上のトラブルや犯罪被害等の防止への取組を、本事業で取り上げており、現代的な課題と言えるネットトラブル等の防止に向けた取組は、他の市町村にも広げていく必要がある。
- また、防犯教室の中で、地域住民との交流による子どもたちの防犯への関心向上に取り組むなど、学校だけではなく、地域住民などの防犯に関わるステークホルダーに、バランス良く関わりを持ってもらいながら取り組んでいる点が素晴らしく、継続してほしい取組である。

2 挨拶運動と地域見守り活動の連携による安全確保体制の構築について

- 挨拶運動をやる上で大切なことが3つあり、1つ目は、子どもたちが「見守り活動者であるということ」を認識すること、2つ目は「活動者の顔を知る」こと、3つ目は「活動者の名前を知る」ことである。

こうしたことで、地域全体に活動者の取組が認識され、取組が円滑になるほか、子どもたちが活動者の名前を呼んでくれることで、活動者自身の士気高揚にも繋がる。

白老町は、これらの大切なことを踏まえて取組を行っているため大変素晴らしい。

- 見守り活動者の高齢化が課題として挙げられるが、後継者育成のためには、見守り活動による「健康の増進」や「活動を通じてやりがいや幸せを感じること」を見える化し、それらを伝えることで担い手を確保することが重要である。

3 各校の情報共有による効果的な安全マップの作成について

- 安全マップで大切なことは、リスクを見える化することである。

次に、リスクの原因を把握した上で対策や活動の改善を考え実行することである。

また、マップを活用した安全教育などに取り組み、マップの作成や教育活動の改善につなげ、さらに生じた成果や課題を把握して見直していくことが重要である。

- マップ作成の際は、GIS という地図デジタルデータベースの活用により、必要な情報を重ね合わせられるなど取組の改善に活用できる。(犯罪危険箇所と子ども 110 番の家の設置場所追加など) また、データで保存できるため経年変化を観察ができる利点がある。
- GIS は防犯の視点だけではなく、交通安全や防災の視点も重ねた安全マップの作成にも活用できることから、推進委員会で得られた交通安全や防災に関する助言内容も踏まえ、より充実した安全マップの作成により、子どもたちの安全を確保してほしい。

交通安全教育

～ モデル地域 音更町 ～

1 実践的安全教育モデル（交通安全教育）

(1) モデル地域について

音更町は、小中学校の通学路に幹線道路が含まれており、隣接する帯広市のベッドタウンとして急速に市街地化が進む中、近年、交通量の増加に伴い、児童生徒が交通事故の被害に遭う事案が複数発生している。

こうした状況を踏まえ、拠点校においては、10年ほど前から、PTAの協力を得て教員が「通学路安全マップ」を作成し、毎年度、新1年生に配付していたが、今年度、本事業の指定を受け、通学路の安全確保及び児童が自ら危険を回避する力を身に付けることができるよう、新たに児童の視点を取り入れた「通学路安全マップ」を作成することとし、マップ作成を題材とした授業を実践するなど、交通安全教育の充実を図った。

これまでの取組を踏まえ、次の3ポイントを示す。

(2) 実践的安全教育モデルのポイント

【モデルPOINT①】 指導方法や教育手法の開発・普及

○「通学路安全マップ」を活用した交通安全教育の推進

モデル地域の取組 ～単元「通学路の交通安全を見直そう」での授業実践

拠点校の木野東小学校で、「通学路安全マップ」の作成に係る公開授業を実施した。

授業では、グループごとに Google Map を活用して通学路の地図やストリートビューを見ながら、危険箇所について実体験をもとに話し合った。

児童は、自分が危険と感じた出来事を互いに交流し、ワークシートに「どこで」「どのような危険があるか」についてまとめ、代表児童がスクリーンに危険箇所を投影し、学級全体で共有しながら発表した。

発表を聞いていた他の児童からは、「やっぱりそこは危ないんだね」などの感想があり、発表を通して、児童は、危険箇所を再認識していた。



GoogleMap を活用した話し合いの様子



発表の様子

【モデルPOINT②】地域の連携による安全確保体制の構築

○通学路合同点検の結果を踏まえた安全確保体制の構築

モデル地域の取組 ～関係機関と連携した合同点検の実施

学校が、児童や保護者、地域住民からの情報に基づき、危険箇所をリストアップし、学校・教育委員会が、道路管理者や警察などの関係機関と連携して合同点検を実施した。

合同点検の結果を受けて、対策が必要な箇所について、各関係機関がどのような対策を行うのかを検討し、その結果を「音更町通学路交通安全プログラム」に掲載した。

また、合同点検の結果については、学校における通学路安全マップの作成、学校便りによる家庭への注意喚起など、安全教育の推進に活用した。



合同点検の様子



通学路安全マップ

【モデルPOINT③】学校間で連携した取組の推進

○モデル地域内での連携した安全確保体制の充実

モデル地域の取組 ～既存の組織を活用した安全確保

モデル地域においては、各校の教職員、PTA、町交通安全協会、町防犯協会等を協力員とした「緑南地区青少年健全育成会」を組織し、地域と学校との情報交換会の開催、機関紙「緑青会」の発行（年3回）、登下校時の交通安全指導の状況把握などを行っている。

また、過去に発生した事故に関する状況等、危険箇所に関する情報を学校間で共有したり、「歩道を左右に分ける」「横列歩行の禁止」などの交通ルールの共通化を図ったりするなど、学校間で連携した取組を行っている。

緑南地区各小中学校の夏休み期間		
	小 学 校	中 学 校
交通安全	<ul style="list-style-type: none"> ★車道で遊んではいけません ★交通ルールを守り、横断歩道を確かめて渡りましょう ★自転車に乗るときは、きまりを守り正しく乗りましょう 	<ul style="list-style-type: none"> ★交通事故にあわないように十分注意をし、ご家庭でも指導してください ★自転車の二人乗りなど違法行為は絶対にしないようにしましょう

緑南地区の小中学校に配付した夏休みの生活に係る文書

交通安全教育 学習指導案

日時 令和3年12月10日
 児童 第4学年1組29名
 指導者 児玉直人
 T. T 須田則之

- 1 単元名 「通学路の交通安全を見直そう」（特別活動「学級活動」）
- 2 単元の計画
 - (1) 通学路の危険箇所の確認、Google Map の活用（※本時）
 - (2) ヒヤリハット体験の共有、危険回避行動の考察
 - (3) 新「通学路安全マップ」の作成
- 3 指導方針
 グループ活動や全体交流の場を設定することで、仲間の様々な見方や考え方に気付き、児童が自分の考えや意識を見つめ直したり深めたりするよう指導する。
- 4 本時の目標
 学校付近の道路状況や危険箇所を理解することができる。（知識・技能）
- 5 事前指導
 事前アンケートを実施し、児童が日常生活において、歩行時や自転車乗車時に、危険と感じている箇所や時間帯、状況などを把握し、本時において、アンケート結果を振り返りながら、児童から回答の多かった、登下校時に交通量の多い交差点で危険と感じたことなどについて共有する。
- 6 本時の展開

	○主な学習活動	◇教師の主な働きかけ	※留意点など
導入	○本時の目標を確認する。 ○危険箇所の印をまとめた安全マップを見て、印の多い箇所などを確認し、学級や学年の特徴などを考える。	◇本時の目標を提示する。 ◇危険箇所に印をつけた安全マップを提示する。	※事前に安全マップを配付し、児童に危険箇所へ印をつけさせ、学級、学年単位で印をまとめておく。
展開 1	○本時の課題を確認する。 〔課題〕 来年度の新1年生に、登下校中の危ないところを知らせよう。 ○〈全体での活動〉 事前アンケートの結果を確認し、歩行時や自転車乗車時に注意が必要な時間や場所、状況について考える。	◇本時の課題を提示する。 ◇事前アンケートの結果を提示する。 ◇（発問）「アンケートの結果を見ながら、歩行時や自転車乗車時に交通事故に遭わないために気をつけることを考えよう。」	※児童のPCにアンケート結果を表示。児童は各自画面を拡大して確認する。 ※児童にアンケートの結果を予想させたり、児童の実体験を聞いたりする。
展開 2	○〈グループでの活動〉 Google Map を活用して、話し合いながら身近な危険箇所を見つける。 ○各グループで抽出した危険箇所について、代表児童がワークシートにまとめる。 ○グループ発表・交流	◇（発問）「歩行時や自転車乗車時に危ないと思う場所を見つけよう。」 ◇グループ活動の前に、学校近隣のコンビニエンスストア周辺を例に挙げ、危険箇所について考えさせる。 ◇グループ発表させ、全体で確認する。	※グループ発表時、Google Map で画像を投影して学級全体で共有することにより、他のグループにも発表内容が分かるよう工夫する。
まとめ	○本時の振り返りをワークシートに書く。	◇児童に感想を聞く。 ◇本時の目標が達成できたか確認する。	※評価方法：ワークシート ※評価規準：通学路の危険箇所を理解する。

2 実践を振り返って

実践をとおして、次の成果及び課題が明らかになった。

1 「通学路安全マップ」を活用した交通安全教育の推進

【成果】

- ・身近な通学路を題材とし、Google Map を活用したことにより、児童が主体的に授業へ参加
- ・事前アンケートの実施など、児童の実体験を基にした授業実践により、危険箇所等の理解の定着

【課題】

- ・「通学路安全マップ」作成後のマップの活用方法

2 通学路合同点検の結果を踏まえた安全確保体制の構築

【成果】

- ・合同点検の結果を踏まえた、学校における交通安全教育の充実
- ・学校、児童、保護者間における危険箇所の認識の共有

【課題】

- ・保護者だけではなく、町内会等と連携し地域全体で危険箇所の認識を共有

3 モデル地域内での連携した安全確保体制の充実

【成果】

- ・既存の組織の活用により、円滑に組織整備と安全確保体制を構築
- ・地域に対して交通安全に係る取組を情報提供することにより、将来のコミュニティ・スクールの導入に向けた機運を醸成

【課題】

- ・コロナ禍における学校間連携の継続的な取組

〔今後の取組について〕

「通学路安全マップ」の今後の活用については、新1年生の児童及び保護者への配付に加え、学校ホームページへの掲載など、広く地域住民に周知を図るとともに、全児童のタブレット端末で随時更新できるものとし、家庭においても親子で通学路の安全を確認、共有できるものとした。このことにより、児童の通学路の安全確保に向けた取組について、地域の理解や協力を得て推進したいと考えている。

本事業で取り組んだ内容について、今後も継続するとともに、成果については、モデル地域内はもとより、町内全体で共有しながら、各地区の実情に即した内容に改善を図り、地域ぐるみで子どもたちの命を守り抜く取組を実践していく。

3 講 評

学校安全アドバイザー：北海道大学大学院工学研究院教授 萩原 亨 氏

1 「通学路安全マップ」を活用した交通安全教育の推進について

- 公開授業において、通学路の危険箇所についてワークショップを行い、子どもたちが実体験をもとにして交流している点がよかった。
- ワークショップでは、グーグルのストリートビューを使って、危険な場所を写真で実際に確認しながら話し合いを進めていることから、子どもたちが危険な場所の状況などを具体的にイメージすることができ、素晴らしい取組であると思えた。
- 今回の公開授業における実践については、他の学校でも取り入れるとよい事例となっていることから、成果を広く発信し、普及啓発に努めてほしい。

2 通学路合同点検の結果を踏まえた安全確保体制の構築について

- 通学路の合同点検が行われ、報告のあった危険箇所について、次のとおり感想等を述べさせていただく。
 - ・橋などで歩行者は狭い歩道を通行することを強いられており、そのそばを通過する車両に危険を感じていた。車両の速度をより一層下げることが考えるべきといえる。
 - ・歩道における自転車との錯綜が危険となることが指摘されていた。歩道では歩行者が優先というルールなどをもっと徹底することが必要といえる。
 - ・トンネルにつながっている道道の信号機のない横断歩道では、横断歩行者（児童）の事故も起きていた。横断歩道での車両の行動をモニタリングし、歩行者がいる場合に一旦停止することを運転手に分かってもらえるような行動を起こす必要がある。

3 モデル地域内での連携した安全確保体制の充実について

- 地域の関係者が集まり、危険な箇所はどこかという議論を続けており、素晴らしい体制となっていると思えた。ぜひ、今回の活動を今後も継続して行ってほしい。

防災教育

～ モデル地域 函館市 ～

1 実践的安全教育モデル（防災教育）

(1) モデル地域について

函館市の恵山地域は恵山道立自然公園に指定されており、活火山の中でも噴火の可能性が比較的高く、監視・観測を他の火山よりも強めている常時観測火山であり、噴火に伴う火山現象が生じた場合、短時間で居住地域等に影響が及び、生命に対する危険も高い。

このことから、恵山地域の児童生徒が火山について理解し、地域住民の一人として日頃からの備えや工夫を基に、噴火時に安全に行動し、被害を軽減する能力を身に付けさせ、防災意識を高める必要がある。

そこで、恵山中学校を拠点校として、学校、地域住民、関係機関と連携した「1日防災学校」を通じて、主体的に命を守り抜く行動ができる児童生徒の育成を目指し、モデル地域の教職員が連携し、安全教育の充実に向けた体制づくりを推進する。

これまでの取組を踏まえ、次の3ポイントを示す。

(2) 実践的防災教育モデルのポイント

【モデルPOINT①】指導方法や教育手法の開発・普及

○火山活動についてのモデル学習指導案の作成と普及

モデル地域の取組 ～火山を題材としたモデル学習指導案の作成

1年生の理科において、火山を扱う単元で、恵山地域では実際に火山の噴火によって、どのような被害をもたらすか考える授業を行った。

目的を明確化し、1人1台端末であるクロームブックを活用し、火山噴火による被害についてグループで調べ学習を行った。市のハザードマップを参考にしながら、恵山地区では実際にどのような被害状況になるかを予測してスライドにまとめ、発表した。

学習内容と自分たちの地域の環境を重ね合わせ、恵山の噴火について具体化し、防災や減災に対する意識を高めることをねらいとした。



発表の様子



実践委員会による参観

【モデルPOINT②】地域の連携による安全確保体制の構築

○学校、地域住民、関係機関と連携して実施した「1日防災学校」による安全確保体制の構築

モデル地域の取組 ～地域合同避難訓練を兼ねた1日防災学校

恵山中学校とえさん小学校の学校運営協議会をもち、地域住民、関係機関を委員とした実践委員会を設置し、本事業を推進した。

中学校での「1日防災学校」を地域合同避難訓練とし、えさん小学校児童、地域住民も参加し、コロナ感染症対策を踏まえ実施した。

実践委員会において、えさん小学校児童の参加対応、避難所開設時の受け入れ態勢等について協議を行い、学校と地域住民、関係機関が連携する安全確保体制の充実につながった。



避難所受け入れの様子



小中学生合同で活動する様子

【モデルPOINT③】学校間で連携した取組の推進

○学校や地域、関係機関が連携した危機管理マニュアルの改善

モデル地域の取組 ～実践委員会での危機管理マニュアルの見直し改善

1日防災学校（地域合同避難訓練）の結果、避難経路と避難所の受付場所が重なっていたため、避難経路の見直しが課題となり、実践委員会において危機管理マニュアルの見直しを行った。

各学校と関係機関による地域の防災に向けた体制づくりとともに、小中学校における危機管理マニュアルの見直しにつながった。



実際の避難の様子



実践委員会の様子

第1学年 理科 学習指導案

1. 単元名 大地の変化 第1章 火をふく大地

2. 本時案

(1) 本時の目標

- ・火山の噴火によって、どのような被害が起こるか調べることを通して、恵山地区でどのような被害をもたらすか考える。

(2) 本時の展開 (6/7)

	学習活動	教師の関わり	◎評価 ※留意点
導入 8分	<ul style="list-style-type: none"> ○これまでの既習内容を確認する。 ・火山の形とマグマのねばりけの関係 ・火山灰の特色 など ○噴火の動画や画像を見て、どんな火山噴出物が出るか確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○これまでの既習内容とのつながりを意識させ、本時の課題につなげる。 ○噴火によってどのような噴出物が出ているか確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ※画像を提示して、振り返らせる。 ※このときに恵山の特徴も触れる。(火山の形など) ※溶岩以外に目が向くよう視点を与える。(煙、岩など)
展開 32分	<p>【めあて】 恵山では火山噴出物によってどのような被害をもたらすか考えよう。</p>		
	<ul style="list-style-type: none"> ○本日の流れを確認し、5つのグループに分かれる。(火山灰、火山ガス 火山弾、溶岩など) ○作業手順を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○本日の流れを説明する。 ○作業手順を説明する。 	
	<p>【課題】 火山の噴火による被害を調べよう。</p> <p>①各グループ (5グループ) でそれぞれ異なる火山噴出物について Chromebook を使い調べる。</p> <p>②調べた内容を classroom 内にあるファイルでスライドを作成する。</p> <p style="text-align: center;">※ 作成のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火山のマグマはどのようなものでできているか。 ・マグマや火山弾等の性質 (何℃くらいあるか。大きさなど) を2～3点程度スライドにまとめる。 <p>③火口付近にどのような被害を与えるかを予想し、スライドにまとめる。(対処法があればそれもまとめる)</p>		<ul style="list-style-type: none"> ※事前に classroom 内にスライドを作成し、まとめやすいようにテンプレート形式にしておく。 ◎火山噴出物について意欲的に調べ、どのような被害が起こるか予想する。
	<ul style="list-style-type: none"> ○課題に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ○机間指導を行い、生徒の意見や発想を拾い、アドバイスを行う。 	
終末 10分	<ul style="list-style-type: none"> ○グループごとにまとめたスライドを発表する。 ○恵山地区で火山が噴火した場合を想定し、恵山中学校付近にどんな被害を及ぼすかまとめる。 ○次時の学習内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○上記の①～③及び作成のポイントを踏まえているかどうかを確認する。 ○恵山地区で火山が噴火したら、どうなるか想起させ、自分の意見をまとめさせる。(恵山地区のハザードマップ等を提示) ・火口から2km以内に恵山中学校があることを踏まえる。 ○まとめから、次時の目標を確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ※時間があれば対処法について考えさせたい。

2 実践を振り返って

実践をとおして、次の成果及び課題が明らかになった。

1 火山活動についてのモデル学習指導案の作成と普及

【成果】

- ・火山噴火の被害について正しい知識を得ることによる、災害時の避難場所や方法など自分の身を守る行動についての理解の深まり
- ・学校所在地での被害の把握や、端末を使った調べ学習など、課題の提示の仕方や解決方法を工夫した授業による、防災意識の向上

【課題】

- ・発達段階を意識した系統的な小・中学校での指導

2 学校、地域住民、関係機関と連携して実施した「1日防災学校」による安全確保体制の構築

【成果】

- ・コロナ禍における、避難所運営等について知ることによる、児童生徒、教職員、地域住民の防災意識の向上
- ・避難訓練の結果を踏まえた、危機管理マニュアルの改善

【課題】

- ・地域合同避難訓練への保護者、地域住民の参加の促進
- ・学校、地域、関係機関が連携した地域合同避難訓練の継続と普及

3 学校や地域、関係機関が連携した危機管理マニュアルの改善

【成果】

- ・学校及び関係機関による地域の防災に向けた体制づくり
- ・地域合同避難訓練（1日防災学校）を踏まえた危機管理マニュアルの改善

【課題】

- ・来年度以降の取組への確実な反映

〔今後の取組について〕

- ・恵山地区の小中学校において、火山についてのモデル学習指導案を継続して活用し、改善を図りながら定着させていきたい。
- ・学校、地域住民、関係機関が連携した体制の中で、地域の親世代への防災にかかわる知識・理解を深める取組を進めていきたい。
- ・恵山地域の小中学校で作成した防災教育計画について、函館市教育委員会が発行する資料等に掲載するなどして、市内で普及していきたい。

3 講 評

学校安全アドバイザー：北海道教育大学釧路校教授 境 智洋 氏

1 1日防災学校、公開授業について

- 火山防災を中心とした防災教育推進ということで、北海道で火口から一番近い所にある恵山中学校が拠点校となったのは、子どもたちが地域の災害を深く理解することにつながる。
- 取組の成果として、地域、関係機関とともに1日防災学校（避難訓練）を実施したことは地域を巻き込み、地域の防災体制を構築するために有効である。避難所設営や避難訓練、公開授業を継続し、地域の方の参加者を拡大していくことが必要である。
- 地域を巻き込み、中学生の頑張りを地域に公開して見せていくことは大変重要。子どもたちが地域を変えて、その積み上げが地域の防災意識を高めていく。

2 教科等横断的に取り組む防災教育の充実について

- 今回の公開授業をきっかけに、教科等横断的な取組を検討していることは重要である。
- 防災ノートを活用して子どもたちが学んだことを、ノートに記録し積み上げていく取組は、子どもたちの振り返りに役立ち、教科等横断的な防災教育につながっていくことから、継続してほしい。
- 防災教育には、3つの「すること」がキーワードとなる。1つ目は「学習すること」、2つ目は「想定すること」、3つ目は「訓練すること」であり、これらが結びついて防災力が向上する。

3 今後の防災教育について

- 防災教育を充実させるためには、地域の状況を足で歩いて、観察することが大事である。野外活動で地形、海、山などの災害の原因となる自然を観察することが大事であり、そこから課題を見出すことが重要である。
- 各学校において時期や時間を工夫し、防災教育につながる野外活動の時間を確保してほしい。

